

児童の保育所・幼稚園等の経験を生かした小学校教育の在り方についての研究

～保幼小接続を意識した互恵性のある交流活動について～

香美市立楠目小学校 教諭 澳本 智宏
高知県教育センター 指導主事 藤原 寛美
チーフ 岡林 律子

本研究の目的は、保育者・教職員の合同研修や保幼小接続を意識した互恵性のある交流活動を通して、小学校教職員の保幼小接続の意識や子どもを見取る力が向上することによる、連続性・一貫性のある小学校教育の在り方について考えることである。

そこで、保幼小接続に関わる職員研修や保幼小の交流活動を実施することで、接続期カリキュラムに関わるA市内小学校の教職員の意識の変化を調査し、保育者・教職員の保幼小接続の意識や子どもを見取る力は向上するのか、その変容を分析した。

その結果、互恵性のある交流活動を実施することで、保育者・教職員の保幼小接続に関わる意識と子どもを見取る力が向上した。また保育所・幼稚園等で培ってきた子どもの様々な力を小学校教育の学習・生活の両面に生かしていくことが大切であることが分かった。

<キーワード> 研修の有効性、互恵性のある交流活動、見取る力、見取りの可視化

1 研究目的

(1) 保幼小接続の必要性と現状

勤務校のあるA市では、平成26年3月に教育振興基本計画（A市教育委員会、2014）が策定され「郷土を愛し、未来を拓く人づくり」を基本理念とし、「0歳から15歳にわたって子どもの育ちの連続性を保証する保育・教育の推進」が施策の柱の一つとして位置付けられ、保幼小接続を重要視してきた。また、同年度（平成26年度）より2年間「高知県保幼小連携モデル事業」を受け、研究モデルの2地域において、幼児期の教育及び保育から小学校教育への連続性・一貫性のある接続期カリキュラム¹が実施され、保幼小がともに各発達段階での教育について相互に理解し、連携する視点を明確にできたこと等の成果を挙げている。

今年度B小学校の入学式に参加した時、体育館の玄関先で立ち止まっている一人の児童を見かけた。式場内には多くの微笑ましい姿の新入生が揃っていたが、一人だけ式に参加できず、入り口で保護者と一緒にステージ前に並んでいる新入生をじっと見ていた。その姿から、式の様子が気になることや、入りたいけれど入れないといった不安な思いがあることは推測できた。

このことから、この時期の児童の心境として「少し、お兄さんやお姉さんになった気持ち」がして、期待に胸をふくらませる児童もいる反面、保育所・幼稚園等から小学校に入学することに対し、何らかの違和感があることで、保育所・幼稚園等で培ってきた力を発揮できずにいる子どももいるのではないだろうかと考えさせられた。

高知県の保幼小接続に関わる取組の進捗状況は、平成26年度幼児教育実態調査（文部科学省、2015）によると「年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない」という実態が59%（20/34市町村）を占めている（図1）。このことから「保幼小接続」の取組が十分であるとは言い難く、全国でも同様の課題が挙げられている。

¹ 接続期カリキュラムとは、**アプローチカリキュラム**（就学前の幼児が円滑に小学校の生活や学習へ適応できるようにするとともに、幼児期の学びが小学校の生活や学習で生かされてつながるように工夫された5歳児のカリキュラム）と、**スタートカリキュラム**（幼児期の育ちや学びを踏まえて、小学校の授業を中心とした学習へうまくつなげるため、小学校入学後に実施される合科的・関連的カリキュラム）を指す。

(2) 国の具体的な動き

文部科学省は、次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（文部科学省、2016）の中で、これまでの保幼小接続の課題と今後の学校段階別の改善の方向性として、幼児教育について四つの具体的な改善方法を示し、これからは、乳幼児期から18年間を見通した連続性・一貫性のある教育を求めている。

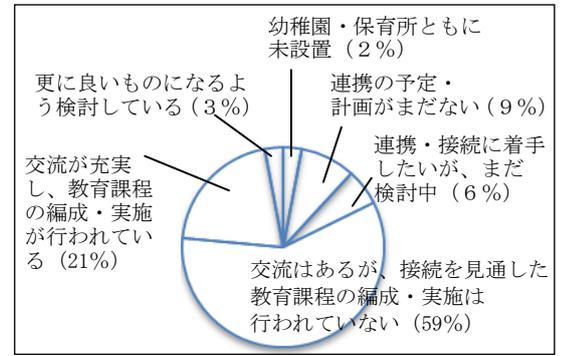


図1 高知県の保幼小接続の状況

幼児教育

- ア 資質・能力の三つの柱を踏まえ、幼児教育で育みたい資質・能力として、「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つを記載
- イ 自己制御や自尊心などのいわゆる非認知的能力の育成など、現代的な課題を踏まえた教育内容の見直しを図るとともに、預かり保育や子育ての支援も充実
- ウ 5歳児修了時までには育てほしい具体的な姿を明確にし、幼児教育の学びの成果が小学校と共有されるよう工夫・改善
- エ 幼稚園教育要領の改訂内容と保育所保育指針及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂内容との整合性を図り、幼児教育全体としての質を確保・向上

中央教育審議会教育課程企画特別部会資料（平成28年8月1日）

(3) 教育現場からの疑問や不安

高知県教育センターが平成28年5月に実施した「保幼小連携教育講座Ⅰ」で、接続期カリキュラムに関わる実践についてのグループ協議が行われた。研修後のアンケート調査（88名回収）には、「保幼小接続」に関わる疑問や不安等が記述されており、保幼小の現場でも「保幼小接続の意識」が十分高められていないことが見えてきた。

また高知県教育センターでの「保幼小接続」に関する研究は、今年で7年目の取組となり、これまで多くの検証がされてきたが、同時に課題も残されている。そこで過去の研究生が記した課題を振り返ってみると、保育現場での疑問や不安等と共通する課題(表1)が見えてきた。それは「計画的な互惠性のある交流活動の実施」と「専門性を高めるための職員研修」の重要性である。

表1 共通する課題

過去の研究生が記した課題	保育現場からの疑問や不安
<ul style="list-style-type: none"> ・保育所と小学校が共通理解を図り、継続的に交流を実施していくためには、年間指導計画に位置付け、継続的に実施していくことが重要である。互惠性のある交流活動を行うためにも、保育所と小学校との交流活動に対するねらいを明確にし、双方の子どもの実態を把握したり、お互いが意見を出し合ったりしていく必要がある。（平成23年度研究報告書より） 	<ul style="list-style-type: none"> ・保幼小接続が重要なのは分かっているが、小学校との交流をどのように具体化すればいいのかわからず、手が回らない。 ・保幼小での連携をとりたいと思う一方、どうやって交流を進めていけばいいのか疑問がある。
<ul style="list-style-type: none"> ・保幼小接続期カリキュラムの特徴を理解する必要がある。（平成26年度研究紀要より） ・保育所との合同研修会へ全教職員が参加できる体制づくりが必要。（平成23年度研究報告書より） 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタートカリキュラム・アプローチカリキュラムの言葉の意味が分からず、実際に小学校でどのような教育をしているのかわからない。

無藤氏は、互惠性のある交流活動を実施するにあたっての重要な点として、①「保幼小の保育者・教職員が一緒になって交流活動の計画を立てること」②「交流活動の実態をよく見て、子どもがそこで何をして、何を学んだかを記録し、分析するのである。単に楽しかったという以上の何かを評価したい」と述べている。また国の次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめにも「子どもたちが行っている学習にどのような価値があるのかを認め、子ども自身にもその意味に気付かせていくことが求められている」とも記されている。

これまでの現状や課題から、今年度は、保幼小接続を意識した「互惠性のある交流活動」の具体化を図ることと、そして子どもたちが、その交流活動で何を学んでいるのかを記録・分析するための力「見取る力」を向上させるには、どのような交流方法が有効なのかを考える。

2 研究仮説

保幼小接続についての理解を深めることと、互惠性のある交流活動を重ねることで、保育者・教職員の子どもを「見取る力」は向上するのではないかと。その「見取る力」を向上させることができれば、遊びの中の学びを可視化・共有することができ、児童の保育所・幼稚園等の経験を生かした連続性・一貫性のある小学校教育を行えると考えます。

また、これまで以上に保幼小接続の取組を組織的・計画的に進めていくためには、その役割を担うコーディネーター役の必要性が考えられるため、その役割についても明確にしていきたい。

3 研究方法

(1) 「接続期カリキュラム」に関わる意識調査（1回目）

- ア 対象 A市内小学校の教職員
- イ 期間 6月（11月に2回目を実施する）
- ウ 内容 「接続期カリキュラム」に関する意識調査

(2) 「保幼小接続」に関わる職員研修

プランニング研修

- ア 対象 A市内の保育者、小学校の教職員
- イ 時期 7月22日
- ウ 内容 木下光二教授（鳴門教育大学）を招聘し、2学期からの取組を検討する。

(3) 保幼小の交流活動

- ア 第1回保幼小交流（交流計画の作成と実施）
 - (ア)対象 C保育園（年長児）、D幼稚園（年長児）B小学校（1年生）
 - (イ)時期 7月15日
 - (ウ)内容 好きな遊びで交流する（年長児が楽しめる遊びを1年生が提案）
- イ 第2回 保幼小交流（交流計画の作成と実施）
 - (ア)対象 D幼稚園（年長児）、B小学校（1年生）
 - (イ)時期 9月6日
 - (ウ)内容 B小学校でのプール体験
- ウ 第3回 保幼小交流（交流計画の作成と実施）
 - (ア)対象 D幼稚園（年長児）、B小学校（5年生）
 - (イ)時期 11月16日
 - (ウ)内容 体を動かしながら、英語に親しむ
- エ 第4回 保幼小交流（交流計画の作成と実施）
 - (ア)対象 D幼稚園（年長児）、B小学校（1年生）
 - (イ)時期 11月29日、12月6日
 - (ウ)内容 製作（ビー玉転がし）
- オ 第5回 保幼小交流（1日入学）
 - (ア)対象 平成29年度にB小学校入学予定の5歳児、B小学校（1年生・5年生）
 - (イ)時期 1月26日
 - (ウ)内容 5年生と一緒に校内探検、1年生と一緒に1年教室で授業の雰囲気を楽しむ

(4) 「接続期カリキュラム」に関わる意識調査（2回目）

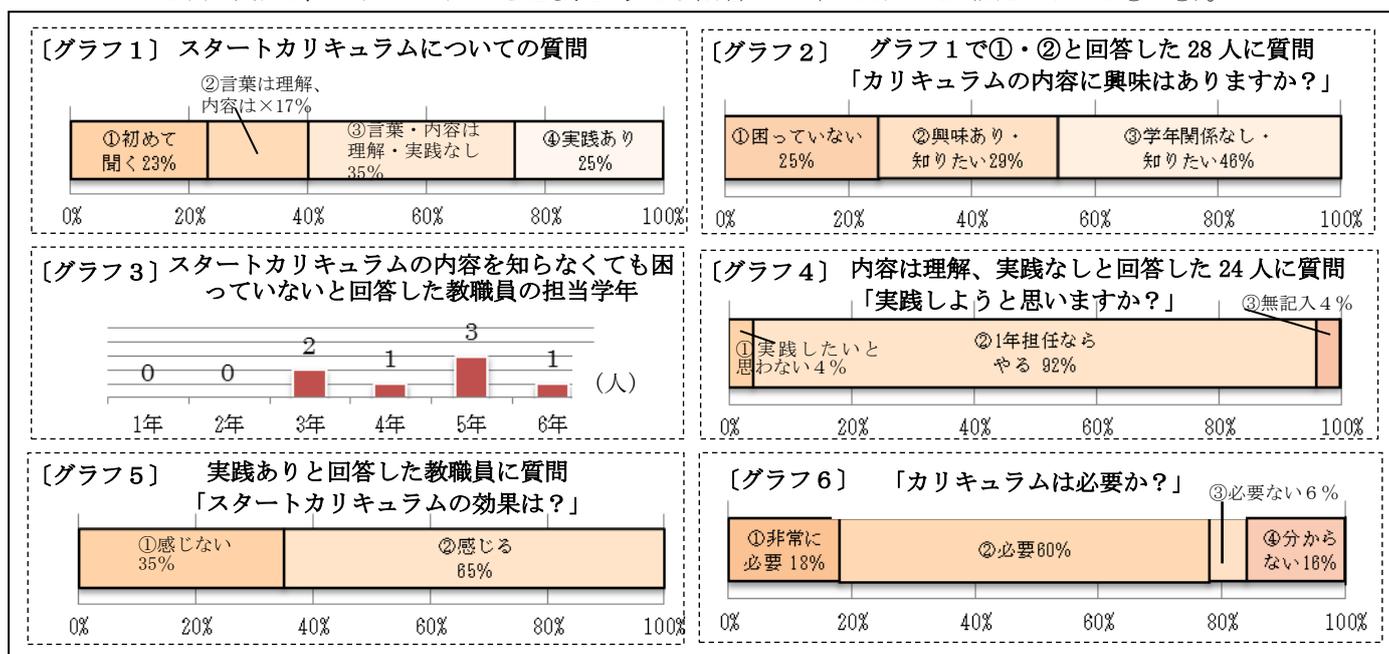
- ア 対象 A市内小学校の教職員
- イ 期間 11月
- ウ 内容 「接続期カリキュラム」に関する意識調査

4 結果と考察

(1) 「接続期カリキュラム」に関わる意識調査（1回目：回収69人）

- ア 結果
 - ・スタートカリキュラムの言葉と内容が分かると回答した割合は60%（図2グラフ1③+④）で、スタートカリキュラムの内容が分からないという割合は、40%（28人 図2グラフ1①+②）であった。

- ・スタートカリキュラムの内容が分からないと回答した 28 人の内、75% (21 人) は、機会があれば内容を学びたいと考えている (図2グラフ2②+③)。
- ・スタートカリキュラムを活用しなくても困っていないという回答は、中・高学年担当の教職員が多かった (図2グラフ3)。
- ・スタートカリキュラムの内容を理解している教職員の内、「実践したい」が 92% (22 人)、「実践したいと思わない」4% (1 人) で、今後実践してみようとする教職員が多かった (図2グラフ4)。
- ・これまでに実践の経験があり、成果があったと感じた教職員の割合は 65% で、残りの 35% の教職員は何らかの疑問をもっている (図2グラフ5)。
- ・6 月時点で、カリキュラムを必要と考える割合は 78% であった (図2グラフ6①+②)。



イ 考察

図2 A市内の小学校教職員による保幼小接続に関わる意識調査(1回目)の結果

- ・今はスタートカリキュラムを活用しなくても困っていないという回答が中・高学年担当の教職員に多い。保育園・幼稚園と小学校低学年との交流が主であることから、低学年担当の教職員の理解に留まっていることが分かる (図2グラフ3)。
- ・1 回目の調査結果から、これまでの研究や保幼小接続の特性理解が、現場全体に十分広まっていないことが考えられる。

(2) 「保幼小接続」に関わる職員研修

ア 結果

- ・接続に関する研修では、子どもたちが遊んでいる姿の写真から、どのような学びをしているかといった具体的な講話を聞き、今後の取組についてのグループ協議を行い、2 学期以降の交流活動の内容について保育者・教職員が共通理解をすることができた。
- ・保幼小の交流活動でどのような「めあて」が適切か、「めあて」に近づく子どもの具体的な姿を想像することにより、保育者・教職員の見取りの視点をしっかりとつこと等、互いに意見を交わし合う場面が見られ、意欲的に学び合おうとする姿があった。
- ・研修前は、「接続期カリキュラム」について、簡単にイメージできる言葉がつながっていたが、それらの起因関係は弱く、接続期カリキュラムについての理解は浅いことが分かった (図3)。
- ・研修後は「交流・接続・連携・考える・役に立つ」という言葉につながり、特に「役に立つ」という言葉とそれぞれが強いつながりをもっていることが分かった (図4)。その頻出数も多いことから言葉先行の理解ではなく、接続期カリキュラムの内容の大切さへの意識の変容が見られた。

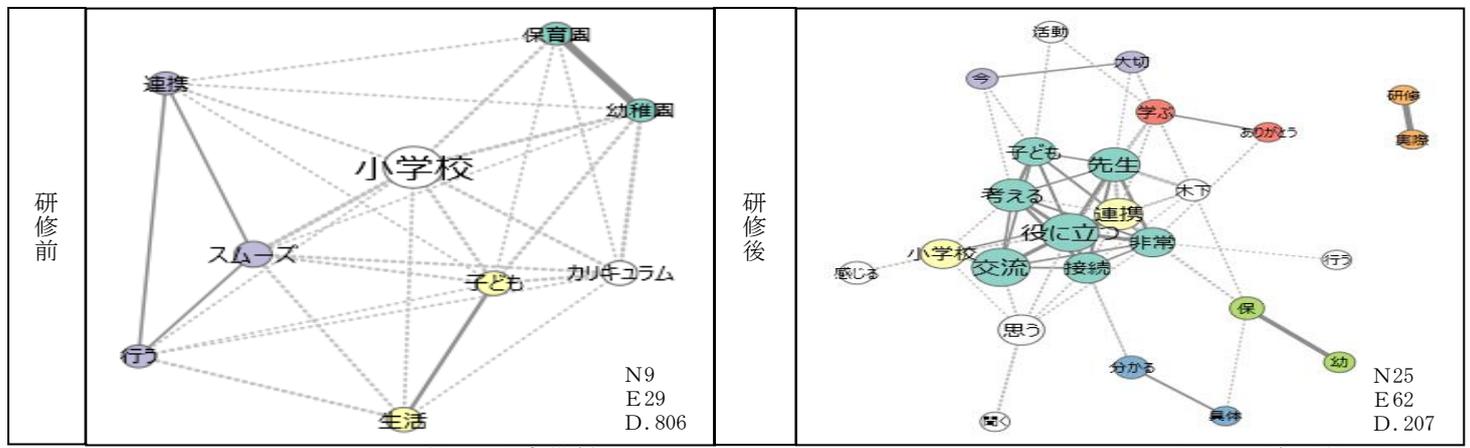


図3 共起関係：語と語

図4 共起関係：語と語

図3、4は計量テキスト分析用ソフト「KH Coder」を使って「共起ネットワークによる職員研修後のアンケート」の記述内容を分析したものである。この共起ネットワーク分析を使うことで、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークを描くことができる。語と語が線で結ばれているので、解釈しやすい。Nは描写されている語（node）の数、Eは線（edge）として描写されている共起関係の数、Dは社会ネットワーク分析で言う密度（density）を示す。

イ 考察

- ・上記の結果から、継続的に研究会等へ参加し、確かな知識を深めること、また多くの保育者・教職員とつながり、情報を共有することが重要だと考えられる。
- ・講義形式の研修に留まることなく、グループ協議を取り入れた。その際、A市の各小学校区内でグループ編成を行い、その中で自分たちの意見を交わし、協議したことが接続を意識した互恵性のある交流活動に向けて有効だったと考える。

(3) 保幼小の交流活動

今年度は、これまでの「連携」から一步前進し、「接続」を意識した交流活動を実施してきた。保育者・教職員の「見取り」の質を向上させるための具体策として、「交流のめあてをもつ」ことに重点を置き、どのような視点で交流活動を見取るのかを明確にした。交流後の振り返りでは、「めあてに近づけたかどうか」「どのような子どもの姿（言葉・行動・表情）からそう思ったのか」等の理由づけを行い、子どもの姿の内面を捉え、より互恵性のある交流活動を計画し、実施することにした。

ア 結果

(ア) 交流活動1回目（7月15日実施）

- ・「～ができたと思う」「できて良かった」等、保育者・教職員の感想に終始してしまい、それぞれの「めあて」に対して、近づけたのかどうだったのかの具体的な話合いができなかった。
- ・交流の見取りから「できた」か「できなかった」かの結果しか見ておらず、めあてに近付こうとしている過程を見取った意見がなかった(表2)。

(イ) 交流活動2回目（9月6日実施）

- ・交流活動の見取りを明確にするため、互いに「めあて」を決め、交流前に各担任に付箋紙を配付し、見取りを文字で残すことにした。そのことで、子どもの具体の姿を拾い上げ、その姿が見られた理由も付け加えながら、見取ることができ始めている。
- ・見取りの数を見ても1回目と比べ、子どもの言葉や表情からの見取りが多くなった(表2)。

(ウ) 交流活動3回目（11月16日実施）

- 前回と同様に見取りを付箋紙に書き留めた。今回の交流活動は、年長児と5年生との交流を計画した。なぜなら来年度、現年長児が小学校に入学する時、現5年生が6年生となることから、学校と新1年生をリードしてもらいたいという5年担任の「ねらい」があったからだ。
- ・3回目の振り返りでは、2回目と比較し、めあてに沿った見取りが多くなった(表2)。
 - ・結果だけを見るのではなく、その過程を見ようとする記述が多くなった。
 - ・5年担任にとって、年長児との関わり方を自分で考えながら工夫する5年生の姿が見られた等の新しい発見があり、互恵性のある交流活動の良さを感じる事ができた。

表2 交流のめあて・内容・見取りの内容

1回目交流	2回目交流	3回目交流
めあて		
C保育園 ・小学生となかよく遊ぼう D幼稚園 ・1年生となかよく遊ぶ楽しさを味わう B小学校1年生 ・年長さんと一緒に仲よく遊ぼう	D幼稚園 ・1年生となかよく水遊びを楽しむ B小学校1年生 ・いっしょに楽しく水遊びをしよう	D幼稚園 ・5年生と仲よくなって、一緒に英語も楽しむ B小学校5年生 ・園児に分かる言葉がけや行動をする ・最後まで自分の役割をはたす
交流内容		
〔園庭・多目的ホール〕 ・自由遊び・ドッジボール ・こおりおに・サッカー ・追いかっこ ・本の読み聞かせ	〔プールでの水遊び〕 ・宝探し ・うずまき作り ・自由水泳 ・イルカジャンプ	〔小学校体育館〕 ・じゃんけん列車&自己紹介 ・アニマルゲーム ・カラータッチゲーム ・だるまさんが転んだ
保育者・教職員の見取り 太文字 (字体：メイリオ) はめあてに沿った見取り、() は見取りの理由		
<行動から> ①小学1年生が進めてくられて、園児も周りを見て活動に参加できたと思う。 ②ゲームの内容も園児がやったことのある遊びだったので、楽しく遊べたと思う。園児が1年生の話聞けるのか不安だった。 ③楽しく遊べて良かった。気になる子もいたが参加もできていたので良かった。	<行動から> ①自分なりにイルカの真似をしようとしていた。(園児に自分もできる、やってみようと思う気持ちがあったからではないか。教職員の励ましもあったからではないか。) ②1年生の話聞いて、行動していた。(今何をするのか教えてくれる等、声を掛けてくれたからではないか。) ③先生の話聞いて、1年生が迎えに来てくれるのを待っていた。(先生の話から、1年生がうずまきの作り方を教えてくれることを期待して待っていた。初めての場所で、積極的になれないが、声を掛けてもらえることで安心できたのではないか。)	<行動から> ①初めてのゲームもあったが、5年生を見ながら参加し、楽しむ姿があった。(5年生も同じように遊んでくれたので、その雰囲気誘われたからではないか。) ②「だるまさんがころんだ」では、園児同士ばかりでなく、5年生の名前を呼んでいた。(自己紹介やひらがなで名前を書いてくれていたからではないか。) ③「じゃんけん列車」の時、ペアが見つからず困っている姿があったが、5年生と一緒にじゃんけんをしてくれて笑顔になった。(5年生が、優しく声を掛けてくれたからではないか。) ④活動の時、膝を曲げ園児の目の高さで会話をしていた。(園児の立場で考えることができていたのではないか。)
<言葉から>	<言葉から> ①1年生のイルカジャンプを見て、「すごい」と言っていた。(1年生の姿を見て、憧れている様子だったから。) ②「宝、見つけた？」と声をかけ、年長さんが宝を持っているか確認する姿が見られた。(取れなかったら残念な気持ちになることを1年生が知っていたからではないか。) ③小学生を見て、オリンピックの選手みたいと言っていた。(小学生の泳ぐ姿がかっこよかったからではないか。) ④宝をもらって、「ありがとう」と言葉を交わしていた。(1個も取れずにいたので、貰って嬉しかったから。自分の姿に気付いてくれて嬉しかったからではないか。)	<言葉から> ①自分の名前を恥ずかしがらずに言える姿が見られた。また、小学生の質問にも答えていた。(最初は恥ずかしがっていた子どもたちも周りの友だちが大丈夫と言ってくれて、じっくり話を聞いてくれたからではないか。) ②自分の名前や自分のことを伝えることができた。(5年生が積極的に声を掛けてくれたからではないか。) ③5年生の隣に行き声を掛け、トントンとたたいて、気づいてもらおうとしていた。(5年生が言葉だけでなく、寄り添ってくれたからではないか。) ④園児が分からないときに、分かり易い言葉で伝えていた。(園児に分かってもらいたいという思いがあったからではないか。)
<表情から>	<表情から> ①積極的になれず、表情が暗かった。(緊張していたのではないか。1年生が声を掛けてくれ、やってみようとする姿も見られたから。) ②小学生がリードしてくれて、手を繋いでくれてうれしそうだった。(積極的に名前を呼んでくれ、近くにいてくれたからではないか。)	<表情から> ①ゲーム内容が分からず、不安な表情から少しずつ明るい表情に変わった。(デモンストレーションもしてくれて、やり方も教えてくれて、安心したからではないか。) ②園児と一緒に楽しむ姿があった。(普段、経験できない活動だったからではないか。)

<p><その他></p>	<p><その他> 小1年生は、一つずつバケツに入れることや宝を種類別に分けて回収すること等のルールを考えることができた。 (2年生と一緒にプールで宝さがしをした時、一つずつ宝を拾ってバケツに入れる経験をこれまでに1度経験していたからではないか。)</p>	<p><その他> 幼5年生が恥ずかしがらずに参加し、リードしてくれたので、子どもたちはスムーズに楽しむことができて良かった。(ゲームと英語の内容が、分かり易くて良かったからではないか。) 小自分たちで決めた役割を最後までやりきった。(上級生としての責任感があったからではないか。)</p>
--------------------	--	--

(エ)交流活動4回目(12月6日実施)

・教職員の見取りは、3回目と同様にめあてに沿った子どもの姿が見取れ、その理由も考えることができていた。

そこで、より振り返りを深めるために、次期学習指導要領に関わる「資質・能力の三つの柱に沿った、幼児教育において育みたい資質・能力」の整理イメージ図に当てはめ、遊びの中の学びが、小学校以降のどのような力につながるのかを確認した。

久しぶりの交流で園児と再会した場面である。「交流を楽しみにしていたよ」等の思いから、児童は手作りの名札を園児にプレゼントした。

これらの思いやりの心は、幼児期から学びに向かう力、人間性等(思いやり)の心情を育んできたからこそ、小学校で見られた姿であり、他にも友だちとのグループ協議等でも生かされる力であると考えられる。



写真

手作りの名札を園児の首にかける児童

作品は完成したものの、ボールが上手く転がらなかったため「どうすれば転がるのか」「何とかして転がしたい」そんな思いの中から、割りばしを使い道筋を作ったと考えられる。これらの学びも「資質・能力の三つの柱」の中の**思考力・判断力・表現力等の基礎**(試行錯誤、工夫、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ)に分類され、この力が、小学校の教科学習の中で、制作することや新しい発見等の思考力につながり、生かされることが考えられる。



写真

作品に工夫を加える児童

グループごとにビー玉転がしができた後、一斉に遊ぶ前に、作品に名前を付ける活動時のものである。

文字や絵をかき加える子どもたちの姿が見られ、ゲームの看板を作るグループもあった。その子どもたちの内面には、「作った作品を見てもらいたい」「一緒に作りたい」といった思いがあり、その手段として文字や絵が使われたと考えられる。「資質・能力の三つの柱」に照らし合わせてみると、**思考力・判断力・表現力等の基礎**(表現することの喜び)や**知識や技能の基礎**(生活に必要な技能の習得)につながる「学び」であることが考えられ、幼児期の子どもの**「伝えたい」「やりたい」という興味・関心が小学校の「文字を学ぶ」という学習のきっかけになると考える。**



写真

作品に絵や文字をかき加える児童

今回の振り返りでの成果は、交流活動の具体の姿(写真)を「資質・能力の三つの柱」に照らし合わせ、幼児期の学びが小学校でもつながり、生かされるということを保育者・教職員で共有できたということである。また、今年度4回の「交流活動」を振り返り、感想や意見を出し合った。

4回の交流活動の振り返り

- ①毎回、「交流活動」を楽しみに待つ園児の姿が見られた。園児たちは、徐々に小学校に慣れ、終盤は生き生きと活動に参加しようとしていた。
- ②コーディネーター役の先生がいて、ある程度計画を立ててくれていたものを、幼稚園側、小学校側で加筆・修正することで実施できたので、負担感はなかった。一から企画をしなければいけないとなると、それぞれ日々のことでいっぱいになってしまい、負担になっていたかもしれない。
- ③今年は、年長児の保護者からも「交流」に関して喜びや安心しているといった声が多く聞かれた。子どもたちが楽しみにしている姿が家庭でも見られ、保護者自身も「小学校へ」という期待感が高まった。就学前に小学校でいろいろな体験をしている楽しそうな子どもの姿を見て、保護者の不安も少なくなり、子どもたちが小学校へ行くことが楽しみになっている。
- ④保育者は、子どもの行動から支援が必要な場面等を予想して、つい困っている子どもに目がいくことが多かったが、今回の振り返りのように「子どもたちの成長」や「学び」といった視点で見ていくことの大切さを改めて感じた。

(ホ)交流活動5回目（1月26日実施：一日入学）

一日入学は、これまで交流を重ねてきたD幼稚園園児だけでなく、来年度入学予定の幼児23名が対象となる。B小学校は以前から校区外からの入学者も多く、今年度もさまざまな保育所・幼稚園等からの参加となった。当初の予定では、1年生との交流だけを予定していたが、活動内容を変更し、5年生との交流も取り入れた。なぜなら、11月に実施した現5年生との交流で、これまで見られなかった子どもの姿が見られ、児童の新たな面を知ることができた等の感想を5年担任がもっており「できればもう1度、今年度中に交流をしたい」との意見があったからである。このことから、5年生とペアになって小学校の探検を計画し、実施することができた。

1年生と年長児の交流は、1年担任の「1年教室の雰囲気や授業の雰囲気を味わってもらいたい」「一日入学で年長児が受け身になるのではなく、主体的に参加してもらいたい」というねらいがあり、体験を取り入れつつ、終盤では体を動かしながらのゲームを行った(表3)。最初は緊張から固い表情だった幼児も少しずつ笑顔が見られ、1年担任のねらいに迫ることができたと考えている。

表3 今年度の交流内容

これまでの交流内容	今年度の交流内容
1年生との交流 ・学校探検 (列になり、各教室を見学する。)	5年生との交流 ・5年生による読み聞かせ(来校した幼児に、5年生が読み聞かせをする。) ・学校探検(自由に興味のある場所へ移動し、質問があれば5年生に聞く。)
2年生との交流 ・手作りのゲームで一緒に遊ぶ	1年生との交流 ・鉛筆の持ち方、音楽に合わせて絵描き歌 ・机の中を見てみる(教科書、ノート、連絡帳、道具箱) ・英語でゲーム(教頭の参加)

最後に、保育者・教職員・保護者を交えての一日入学の振り返りの時間を確保した。保育者・教職員の見取りだけでなく、保護者の視点から見た一日入学の意見を聞きたいと考え、振り返りにも参加してもらった。後日の反省会で出た「体を動かす活動を先に取り入れると、園児の緊張もほぐれやすい」等の意見は次回の一日入学の修正点となった。また、各取組に参加する子どもたちの様子を見た「今回の一日入学に満足できた」という保護者の意見から、入学に対する不安や疑問を少しでも解消できる取組になるのではないかと考える。さらに一日入学を充実したものにしていきたい。

・3回目の5年生との交流を受け、これまでの一日入学での交流内容を見直し、5年生を含めた一日入学を行うことができた。そのことで、5年生は来年度最上級生としての自信をもつことができた。

・5年生の児童の中には、初めは恥ずかしさ等から、ぎこちない関わりになっている姿も見られたが、活動を通して次第に打ち解け、自分なりに考え、工夫する姿が見られた。

イ 考察

(ア)1回目の交流

・十分な振り返りにならなかったのは、保育者や教職員に子どもの姿を見取る視点を具体的に示すことが不十分だったと考える。

・「～ができていた」等、めあてが達成できたのか、できなかったのかという結果の見取りしかなかったことから、めあてに向かう過程の見取りが十分でないことが考えられる(表2)。

(イ) 2回目の交流(表2)

・教職員の見取りの視点を意識する意味で、「めあて」や「めあてに近づいたと思われる具体の姿」を決め、さらに付箋紙に見取った子どもの姿やその理由を記述したことから、見取りの数が増えた。つまり、教職員が具体的な子どもの姿や理由を考え始めたのではないだろうか。

(ウ) 3回目の交流(表2)

・2回目と同様に見取りを記述したことで、めあてが意識できたと考えられる。
・徐々に具体的な子どもの姿が見取れるようになり、その理由も併せて振り返りができるようになってきている。
・5年担任の新しい発見(園児を思いやる5年児童の姿等)は、交流の中での5年児童の学びは何なのかをしっかりと見ようとする意識があったからではないかと考える。
・今回の交流活動を終え、課題が見えてきた。それは保育者・教職員が見取った子どもの力が、小学校のカリキュラムのどこにつながっていくのかということ「可視化」することである。このことができれば、幼児期に培ってきた学びを小学校のカリキュラムの中で、どのように生かすことができるかということを保育者や保護者に理解してもらえないのではないかと考える。

(エ) 4回目の交流

・「めあて」に沿った子どもたちの見取りの内容が多くなり、これらのことから保育者・教職員の見取る視点が変わり、「子どもを見取る力」は向上していると考えられる。
・変容した要因は、やはり保育者・教職員で事前に交流計画の内容を検討し、交流実施後に振り返りができたことが考えられる。
・交流後に園児や児童の「具体の姿が見られたかどうか」「なぜ、そのような姿が見られたのか」等の理由を考え、交流によってお互いが成長できる互惠性のある交流活動を仕組めたことが有効だったのではないだろうか。

4回目の交流の振り返りでは、「可視化」をすることにより、幼児教育での学びと小学校教育での学びにつながりがあることを参加者全員で確認できた。交流活動の具体の姿から共通理解を図ることができたことにより、これまでの振り返りから1歩前進できたのではないかと考える。このような振り返りの方法なら、小学校以降の「どの学びにつながるのか」が分かり易く、保育所・幼稚園等から小学校へ「何を接続するのか」を保育者・教職員がイメージできるのではないだろうか。

(オ) 5回目の交流(一日入学)

・5年生の姿の変容から、来年度最上級生としての自覚が高まったと考えられる。
・子どもの具体の姿・内面を見ている見取りは、これまでの交流活動の振り返りと比べると、少なかった。原因は、見取りの方法が十分徹底できていなかった点と初めてB小学校に来る保育者が多かったことが考えられる。

(4) 「接続期カリキュラム」に関わる意識調査(2回目:回収68人)

ア 結果

・「スタートカリキュラム」という言葉の認知及び内容が分かると回答した割合は、92%(前回60%)に増えた(図5グラフ8)。
・スタートカリキュラムの言葉・内容が分からないという割合は8%(前回41%)(図5グラフ8)だが、その8%の教職員は今後、内容を学んでみたいという前向きな意見をもっている(図5グラフ9)。
・スタートカリキュラムを活用しなくても困っていないという回答は、0%(前回25%)になった(図5グラフ9)。また、カリキュラムの内容まで理解しているが、実践したことがない教職員の

内、「実践したい」が94%、「実践したいと思わない」が6%で、今後やってみたいと考える教職員は多い(図5グラフ10)。

・効果を感じたと考える割合は、89% (前回65%) となった(図5グラフ11)。

・スタートカリキュラムの必要性を感じている教職員は87% (前回61%) になった(図5グラフ12)。

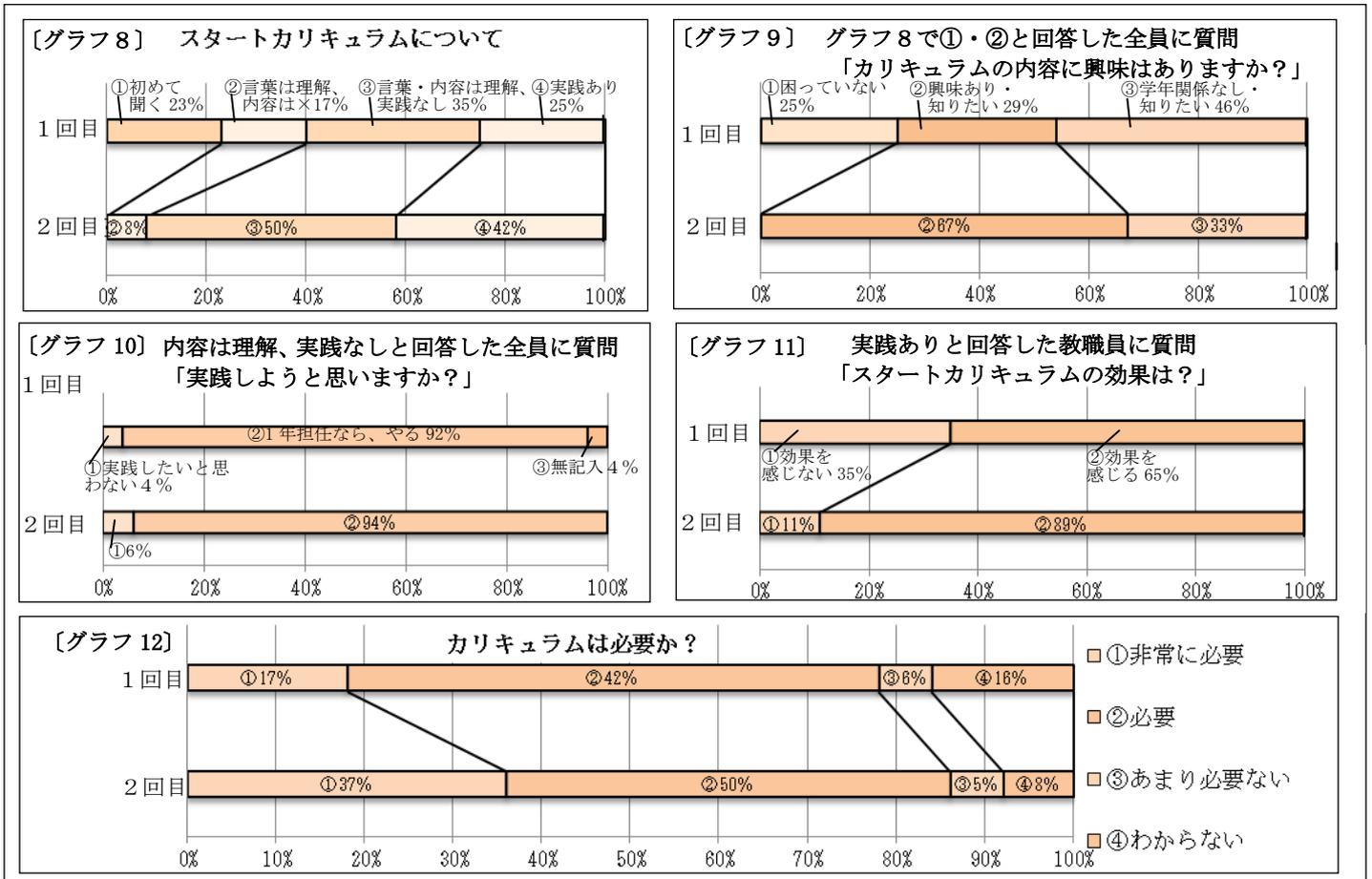


図5 A市内の小学校教職員による保幼小接続に関わる意識調査(2回目)の結果

・抽出教職員の変容

6月の意識調査から11月の意識調査まで「カリキュラムの必要性を感じていない、もしくは必要かどうか分からない」と感じていた教職員の考えを追跡すると意識の変容がみられた(表4)。

表4 抽出教職員2人の変容(教職員A・Bの網かけは、研修前と比べ意識が変容したと思われる部分)

アンケートの調査内容	教職員A	教職員B
6月意識調査(1回目) スタートカリキュラムの必要性	必要性を感じたことがない。 スタートカリキュラムというプログラムがどうして始まったのか、原因がよく分からない。	分からない。 全てを行わなければいけないという制限ができると困るが、参考になると思う。自分自身、数年前に指導案集を渡されただけでなので、活用の仕方が分かっていないこともある。
研修(7月22日)前 接続期カリキュラムについての記述	新1年生が学校に楽しく慣れることができるようにする。小学校と保幼が連携して、情報を共有する。保育での学びを小学校の学びへとつなげていく。	保育園とのギャップ解消。小学校入学後の学校生活になじみやすくするためのもの。
研修(7月22日)後 ①. 研修について 1. 非常に役に立った 2. 役に立った 3. やや役に立った 4. 役に立たなかった	①. 役に立った 幼児と児童の関わり方が、少し分かった。	①. 非常に役に立った 子どもたちは大人が準備したもの以外で学ぶことの方が多いのかもしれないと気付くことができた。

<p>②. 研修前と後では、考えが変わりましたか</p> <p>③. 研修の感想</p>	<p>②. はい</p> <p>③. 保幼小が連携して、何か活動することは、幼児にとっては、小学校を身近に感じる機会となり、1年生にとっては、人に手助けされるのではなく、手助けをする立場となり、小学校生活を送る上で、なかなか体験できないことを学ぶ機会であることが分かった。</p>	<p>②. はい 連携と接続の違いを説明できるようになった。</p> <p>③. 実際に念入りな打ち合せができ、とても実りのある研修となった。グループの先生にも恵まれ、アイデアが次々に湧き、楽しんで計画を立てることができたように思う。このわくわく感をもち帰って、交流準備を子どもたちと一緒に楽しみたい。</p>
<p>11 月意識調査(2回目)</p>	<p>保幼小とスムーズにつないでいくことの重要性を知り、スタートカリキュラムの必要性を感じている。子どもたちが入学して、少しでもスムーズに生活できるのなら、スタートカリキュラムを実施したいと考える。</p>	<p>保育園で経験したことを発展させた学習活動は、子どもたちも取り掛かりやすいと思うことから、小学校生活をスムーズに送るためにもスタートカリキュラムは必要と考える。また、スタートカリキュラムと同様にアプローチカリキュラムの実践・改善も必要。</p>

イ 考察

- ・「言葉と内容の理解」及び「実践あり」の割合が増加(図5グラフ8)しているのは、今年度、接続期カリキュラムについての理解を深めるための研修を充実させたことや、カリキュラムの重要性を感じ実施したことが理由と考えられる。
- ・スタートカリキュラムの効果を感じた割合も24%増加(図5グラフ11)しており、現場の教職員が「保幼小接続」を前向きに捉え、取り組んだからだと考えられる。このことは、スタートカリキュラムは必要だ(図5グラフ12 2回目①+②=87%)と考える割合が増えたことでも同様のことが言えるのではないだろうか。
- ・表4のように接続期カリキュラムの必要性を感じていないや必要かどうか分からないと回答した教職員が「必要」だと変容した背景には、今年度保幼小接続に関わる研修等に参加(1人当たり平均2.3回)したことや年度当初にスタートカリキュラムを実施したこと、また年間計画に保育所・幼稚園等との交流活動を位置付け実施をしたことが、これまでの意識を変容させた要因と思われる。
- ・保幼小接続を進めていくために「実際に行動してみる」ことの重要性もデータからも推測できる。スタートカリキュラムを実施する中で、もし課題が見つければ解決に向けて研修に参加しようとする前向きな気持ちにも変わるのではないだろうか。

(5) 保育所・幼稚園等の経験を生かした小学校教育

今回の研究を通して、年長児と関わる多くの機会があった。そんな中で印象的だったのは「自分たちの力でできる」「工夫もでき、友だちと相談もできる」「子どもなりに頑張れる」といった姿が随所で見られたことである。幼児期に培ってきたこれらの力を小学校で発揮できるよう、まずは子どもの具体的な姿を見て、話を聴き、それぞれの子どもの実態把握をすること。その後、小学校の教科の学習でそれぞれの子どもたちが主体的に学習できるよう様々なアイデアを出し、支援を行いながら授業を組み立てていくことが重要になると考える。決して「こうでなければならない」といった固定観念を押し付けるのではなく、一人一人の子どもを考えを生かそうとする授業づくりや学級経営が大切であると考えます。

また交流活動を計画・実施していく中で、保育者や教職員、他の教育機関がつながることと同時に、各校で組織的に取り組んでいくことが必要だと感じている。その組織の中でも重要な役割を担うのが、「保幼小接続のコーディネーター役」である。今年度の交流活動(全5回)が実施できたのは、細かな計画の立案や日程の調整ができたことはもとより、交流活動の中心的な立場となって保育者・教職員とつながったからではないだろうか。その中で気軽に声を掛けたり、掛けられたり、話し合いができたことが保育者の感想にもある通り、有効であったと感じている。組織として、このような役割を作ることで、交流活動がより充実したものになるのではないだろうか。

コーディネーターの役割

1. 自校の保幼小接続の現状を把握（子ども・教職員・組織体制等）
2. 担任との交流の年間計画作成（おおまかな日程と内容）
3. 活動計画を立案
4. 保育所・幼稚園等との日程調整、交流内容の検討、めあての決定、活動計画の修正
5. 実施当日の準備・運営等
6. 実施後の振り返りとまとめ（次年度に向けたデータの整理）

5 成果と課題

(1) 成果

○教職員の見取る力を向上させる「互恵性のある交流活動の方法」を検証することで、保育者・教職員双方にとって有効であり、何より子ども達の安心につながることが分かった。

○「接続」を意識した交流活動を実施することで、保育者・教職員は、子どもからなぜそのような姿が見られたのか、何を学んでいるのかといった子どもの内面を見ようとしてきている。

○園児・児童がめあてをもって交流活動に取り組むことや保育者・教職員がめあてに近づこうとする子どもの姿を見取ろうとすることが、互恵性のある交流活動を進めるために有効であった。

○保育所・幼稚園等と小学校の交流活動を重ねることで、事前の活動内容の検討や事後の振り返りが充実し、「接続」を意識した交流活動を実施することができた。また、子どもたちは小学校への入学を楽しみにしているという保護者からの意見、5年児童の振り返りに、来年度最上級生として1年生を迎える自信ができた等の意見があり、双方にとって互恵性のある交流活動ができた。

○A市の教育委員会から現状を聞き取る中で課題が見え、その課題を解決するために何が必要か、市の担当者と継続的に相談を行うことで、研究の方向性と取組内容を考えることができた。

○保幼小の接続を図るためのコーディネート役が大まかな計画を立てたことで、保育者・教職員にとって負担感が少なくなり、取り組みやすかったという声から、コーディネート役の必要性を感じている。

(2) 課題

○保育者・教職員が見取った「学び」が小学校のどのような学びにつながっているのかを可視化し、お互いが理解し合える資料を作りためていく必要がある。

○「保幼小接続」を充実させるためには、各校単位で組織づくりが必要であり、コーディネート役を位置づけ、他の教育機関とつながるように働きかけていくことが大切である。また、それを可能にしていくためには管理職と相談し、組織体制づくりを構築していく必要がある。

【参考・引用文献】

文部科学省(2008):小学校学習指導要領解説

厚生労働省(2008):保育所保育指針解説書

文部科学省(2008):幼稚園教育要領解説

文部科学省、厚生労働省(2009):保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集

文部科学省(2010):幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)

文部科学省(2015):スタートカリキュラムスタートブック

文部科学省(2015):平成26年度幼児教育実態調査

文部科学省(2016):次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて(報告)

内閣府、文部科学省、厚生労働省(2016):幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

スタートカリキュラム:国立教育政策研究所 幼児教育研究センターHP

高知県教育委員会(2016):第2期高知県教育振興基本計画 平成28年3月策定

香美市教育委員会(2014):香美市教育振興基本計画 平成26年3月

無藤隆(2006):就学前教育と小学校教育との連携 出典 初等教育資料2月号